

平成10年度特定研究 都市の成熟と芸術の役割—歴史的建造物と芸術の共振 No. 3

研究員

芸術学部助教授 前川 義春 国際学部教授 大井 健地 芸術学部助教授 鰐澤 達夫
芸術学部講師 伊東 敏光 芸術学部客員研究員 松本 憲治 芸術学部協力研究員 難波 裕子



サントリー株式会社 宮島工場内倉庫外観

●研究の概要

わたしたち特定研究グループは「広島市に残された歴史的建造物を会場として、芸術展示を行い、歴史と向かい合いながら独自の芸術表現を築く。」という研究目的でこれまで3回の実験展示・コンサートを行ってきた。この研究は当初の計画通り第3回をもってひとつの区切りとし、その期間内に行われた研究・調査・実験内容を総まとめしたいと考えている。

過去に会場として使用された歴史的建造物は次の通りである。

第1回

広島大学学校教育学部旧図書館（南区東雲3-3-33）
1995年12月11日～23日に開催
（内容は広島市立大学紀要 平成9年版 P. 60～P. 65に報告）

第2回

旧陸軍糧秣支廠倉庫（南区宇品海岸3-11）
1997年1月4日～15日に開催
（内容は広島市立大学紀要 平成11年版 P. 72～P. 81に報告）

広島大学学校教育学部旧図書館は現在広島大学付属東雲小・中学校の教育実習施設および生徒父兄の美術展示場などとして活用されているが、旧陸軍糧秣支廠倉庫は湾岸南道路の建設のため、わたしたちの芸術展示終了後

取り壊され現存しない。



サントリー株式会社 宮島工場内倉庫展覧会風景

第3回の芸術展示を開催するにあたり、わたしたちは過去2回の研究期間中の調査を通して、広島市内に現存する芸術展を開催するにふさわしい歴史的建造物をリストアップし視察または関係者と協議した。しかしいずれも様々な理由により開催不可能または今回の会場として不都合があり成立しなかった。

しかしこれらの歴史的建造物はわたしたちの興味をそそる外観と室内空間を持ち、将来の芸術展示および活動の場としての可能性を残すものも多く、ここに建造物名とその概要をあげておく。

①広菱倉庫（南区宇品海岸3-2-23）

戦後間もなく建造された三階建て鉄筋コンクリートビルで建物全体を夏蔭が覆い、重厚かつ美しい外観を備えている。内部空間も各階360㎡、総面積1080㎡あり、当時広島で探しえる芸術展示に適した最良の空間の一つであった。

この建物は本研究第2回目の会場となった旧陸軍糧秣支廠倉庫に隣接しており、湾岸南道路の建設予定地内であった。関係者と協議し最後まで芸術展示の可能性を残し、わたしたちも是非とも実験展示を試みたい場所であったが工期がせまり平成10年に取り壊された。

②旧陸軍被服支廠（南区出汐2-4-60）

・1913年建設RC造り（レンガ張り）

・現在四棟のうち三棟は広島県が管理している。将来的に瀬戸内博物館や現代音楽館などの構想があるが、現在構想を凍結。

・棟内部にモルタル剥離がみられるとともに、防火設備・非常階段等も取り壊しているために不特定多数の入室は不可能。

③広島文理科大学本館（広島大学旧理学部）(中区千田町1-1-89)

・1931年建設RC造り三階建て

・現在この建物は文部省外郭団体国有財産管理センターが管理している。

・内部は傷みが激しく部分的使用は可能性があるが大規模な展示は難しい。



伊東敏光 ◆指の映る鏡 他1点 鉄、レンガ

④日本銀行広島支店（中区袋町5-21）

・1936年建設RC造り三階建て地下一階

・平成9年、この建物の有効活用に関する答申書が跡地利用構想委員会より広島市長に提出された。また平成12年7月広島市指定重要文化財として日本銀行より無償貸与されている。

・この建物は歴史性・場所性・保存状態またその重厚な存在感からいっても芸術展示の場としてもっとも興味ある建造物である。広島市がその活用について検討を行っており、わたしたちもこの建物の可能性について具体的に提案をしていきたい。

⑤広島通信病院

⑥已斐調整場送水ポンプ室

⑦旧中国電力可部発電所（現太田川漁協事務所）

・三件とも美しい外観と内部空間をもっているが、小規模な展示や個展ができるほどのスペースで大規模な展示やコンサートは不可能であった。しかしこれらの建物は展示会場や活動場所として適した環境を備えており、将来的に個展等を中心とした展示の可能性を探

りたい会場である。



鍛澤達夫 ◆狂気の海 結界 大理石粉末、木、顔料、灰、ガラス、他

私達は上記の建造物について協議をする一方で他の可能性についても調査をおこなった。その中の一つである佐伯郡大野町のサントリー株式会社宮島工場の中にある倉庫を視察させていただいた。総床面積2650㎡(62.8m×42.2m)、天井高が有効で5m近くある大空間に、すぐさま心をうばわれたと同時に第1回目の紀要の中(平成9年版P.65)にも述べられているロサンゼルス現代美術館建設の例が頭に浮かんだ。

これは1984年ロサンゼルスオリンピックに向けて現代美術館を市内に完成させようとしたが、竣工が間にあわず止む得ず市内にあったいくつかの旧倉庫が、建築家フランク・ゲーリーの設計によって低い予算で整備され仮の美術館とされた。しかしこの仮の美術館が大成功をおさめ市民の支持により新しい美術館が完成した後も、現代の実験的な作品の展示や収蔵の場として使用され現在はもう一つの常設の美術館となったという例である。

このサントリー株式会社宮島工場は現在操業を停止しているがごく最近まで近隣の方々が毎日通い生産活動をおこなっていた場所である。昭和48年に建設されたこの建物は歴史的建造物にはあたらないが、ここで芸術展示を行うことにより社会と芸術の新しい関係を生むことが出来るのではないかという思いと、上記のロサンゼルス現代美術館の例を自分たちの目で検証する意味もあり第3回目の会場として使用させていただくことにした。

実施内容は次のとおりである。

場所：サントリー株式会社宮島工場内倉庫

(広島県佐伯郡大野町丸石2丁目6番7号)

作品展示期間 1998年9月23日(水)～10月2日(金)

(開場時間 11:00～19:00)

出品者 伊東 敏光 鍛澤 達夫 前川 義春

講演会 1998年9月27日(日) 17:00～18:00

演題 『美術の力』

越前 俊也（広島市現代美術館学芸員）
 コンサート 1998年9月27日（日） 18：30～19：30
 松本 憲治 他4名
 （コンサートについては別紙松本憲治より報告）



前川義春 ◆10メートルの流動体 他2点 御影石

● 3回の『歴史的建造物と芸術の共振』

第1回の広島大学学校教育学部図書館および第2回の旧陸軍糧秣支廠倉庫はまさに歴史的建造物というにふさわしく、長い年月を耐えぬいた深みを帯びた外観と、先人たちの様々な痕跡を残した美しい内部空間を持っていた。わたしたちはこの歴史の厚みを肌で感じながら独自の芸術表現を築こうと努めた。また第3回のサントリー株式会社宮島工場内倉庫は社会と芸術の新しい関係を生むことを目的に作品展示・コンサートをおこなった。

こうした建物は通常一般の方々が中に入って見ることは出来ないことが多いが、今回の企画に毎回500人近くの方が来てくださり実際に建物の中に身を置き、その雰囲気を感じとっていただいたことには大きな意義があったと思っている。またわたしたちにとっては多くの方から様々な御意見、御感想を聞かせていただいたことや、研究期間中におこなった調査や研究は今後の創作や新たな研究をおこなう上で大きな糧となった。

この3回の展示会を振り返るにあたり最近の二つの見聞を書き添えたい。

まず第一に朝日新聞平成12年9月1日付の大東文化大学教授溝口雄三氏の記事より

『昨秋のこと。ブリュッセルのある広場に立って、私は足元の石畳に畏怖に似た感慨を覚えていた。その石畳が中世に敷かれたものと知ったからだ。その広場のまわりには、教会や市の庁舎があり、ともに中世のゴシック風建造物で、今も使われていた。中世はそこでは日常の中で今も現在形で生きてきた。—中略—

多くの日本人の歴史意識では、それぞれの時代は、古い色の棒が終わるとその先に新しい色の棒が接続する、という風に、時代の連続は色違いの『棒つなぎ型』として観念される。ブリュッセルではどうもそうではない。古い芯の周りを新しい皮が囲みながら太くなっていくように時代意識が『年輪型』に連続している。輪切りにすれば、古代、中世、近代、現代が同じ断面に共存している。各時代は前の時代に激しく反撥しながら、実はそこでは時は重奏曲を奏でている。私はそれをブリュッセルの石畳に聴いた。

我々の歴史意識が多く棒つなぎ型なのは、新しさを求めて前へ前へとつんのめってきたからだろう。我々にも江戸と明治と現代の重奏曲を聴く年輪型の時代感覚がもっとあっていいのではないか。』

日本とヨーロッパでは風土も歴史も違う。ヨーロッパの手法を日本にそのまま適用する訳にはいかないことはいうまでもない。しかし都市の豊かな成熟を願う市民や行政また美術にたずさわる人たちにとても重要な考えかたである。



下山芸術の森・発電所美術館外観



下山芸術の森・発電所美術館
 展示会風景（北岡哲・岡田徳右衛門順一）

そして第二にわたしたちがこの研究を始めた1995年、富山県下新川郡入善町（にゅうぜんまち）に下山（にぎやま）芸術の森・発電所美術館が開館した。大正14年に

建造された練瓦づくりの水力発電所を、町が電力会社から譲り受け美術館として再生させたものである。1996年には国の有形文化財に指定されている。この発電所美術館の開館に関する記事を度々雑誌で読んでいたので、これまでの研究を総まとめにするにあたり是非訪ねてみたい場所であり取材させていただいた。

入善町は北陸自動車道黒部インターをおりて約15分のところにある。人口は約29000人。田圃の中に忽然と発電所美術館があらわれる。大正時代の面影を残した堂々とした外観であり、周囲の田圃風景とよく調和している。内部空間は1階が463㎡、2階が210㎡あり天井高は10m、おもに現代の立体作品をあつかい企画展示のみである。

学芸員一人が運営にあたり、町の一般の仕事とかけもちで、多忙をきわめている。限られた予算の中での運営で困難も多いということだが、招待された作家たちは建物を見ると是非展示してみたいという思いにかられ、ほとんどがこの空間にあわせて新作をつくるという。まさに作家の創作意欲をかきたてる空間である。わたしたちが研究を始めたその年にわたしたちが願っている一つの姿が誕生していたのである。

上記の発電所美術館とよく似た光景を今年初めここ広島でも目にした。わたしたちが企画を見送った旧中国電力可部発電所（現太田川漁協事務所）を借り受け広島市立大学の学生が個展をおこなった。また己斐調整場送水ポンプ室においても一般には非公開ながらも学生たちが実験展示をおこなった。ともに歴史の重みを感じさせる重厚な内部空間と作品の調和が美しい。学生たちの発表の場を求める開拓精神のたくましさをうれしく思うと同時に広島の発表の場の足りなさを痛感した。



旧中国電力可部発電所内展示 岩井久美子 ◆lyric
アルミ、塗料



己斐調整送水ポンプ室内展示 中村圭
◆APARTMENT HOME スチレンフォーム

わたしたちにはこのような理想となるような目的に応じた大小の発表の場が必要である。そこで創造される独自の芸術は都市の豊かな成熟に重要な役割をになうだろう。今回研究を進めてきた広島市内の歴史的建造物のいくつかが常設の芸術展示の場となってくれることを心から願っている。またこれらの建築物は都市環境の上でも重要な存在である。

最後になりましたが第3回目の作品展示、およびコンサートに多大なご協力をいただいたサントリー株式会社と、これまでの3回の研究に数々御協力、御指導をいただいた方々にこの場を借りて心よりお礼を申し上げます。

都市の成熟と芸術の役割

助手/大塚園子 西本博恵

報告と所感

芸術学部客員研究員

松本 憲治

1) 第三回「都市の成熟と芸術の役割」—歴史的建造物と芸術の共振—におけるコンサート報告

(1)概要

三人の作家（前川義春・彫刻/伊東敏光・彫刻/蝦澤達夫・空間造形）による作品群の配置された空間内部での現代音楽コンサート。

(2)場所・日時

- ・(株)サントリー旧宮島工場跡
- ・1998年9月27日（日）18:30~19:30

(3)コンサート趣旨・目的

- ①作品群と共振すること
- ②「工場跡」の広い空間を無駄なく生かせること
- ③現代において展開されている「新しい響き」の洗練の試みであること

(4)コンサート・タイトル

〈近代の伽藍にてNo3〉—電子音楽のひろがり—

(5)プログラム構成（約1時間）

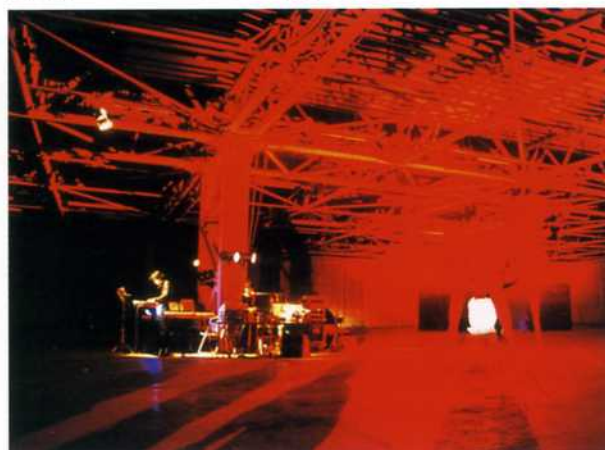
- ①解説
.....
- ②導入のための電子音楽（松本憲治）—約7分—
.....
- ③「鋏」(落見子)—2分—
- ④“Summer”—ver. 1. 02（落見子）—4分30秒—
- ⑤「砂利」(落見子)—8分45秒—
- ⑥「輪」(落見子)—約6分30秒—
- ⑦「転」(落見子)—約7分—
.....
- ⑧三声のソプラノと電子音楽のための「シレーヌ」(松本憲治)—約20分—

(6)出演者・スタッフ

柴久美子（Sop.）畑正恵（Sop.）前川ひとみ（Sop.）
落見子（作曲、演奏、コンピューター操作）
松本憲治（作曲、演奏、コンピューター操作）

照明/稲田道則（プラン・操作）
音響/大木剛（株篠本照明音響部）

(7)記録 ホームビデオで収録・編集したVHSテープ



コンサート風景

2) 所感

(1)過去三回の芸術展、および現代音楽コンサートの趣旨確認

わたしたちは、

- ・「既成にとらわれない、自由な表現活動の場」
 - ・その展開を通じて芸術（シリアス・アート）活動の広い認知の中から醸成される都市（広島）の「精神的成熟」を求め、そのため、
 - ・既成の美術館やコンサートホールでないこと
 - ・地域の歴史的背景を背負った場所であること
 - ・現代性のあるシリアス・アートを展開すること
- などを条件として、過去三回の芸術展、および現代音楽コンサートを行ってきた。

（※シリアス・アート=非商業主義的な芸術）

(2)「芸術=精神性の深まり」という視点からみた現代の都市（特に地方において）

現代の都市機能の論議は何よりも、より洗練された経済活動システムの追求をもって語られ、そのさしだすヴィジョンは、一言で言えば「快適な消費生活」であろうか。しかしその先の「市民の精神的活動」の広く深いヴィジョンについては、明確に語られていない現状がある。それは、同じく人の「精神性」を司る「宗教」という伝統様式が、都市の表の顔=機能的な経済活動システム・豊かな生活=に覆い隠され、触れられないのとパラレルであるように思われる。

このような環境の中での非商業主義的な芸術的創造行為、そしてその作品は、次のようなものの中に閉ざされ、その内部のみでの「流通」に自閉しやすいといえる。

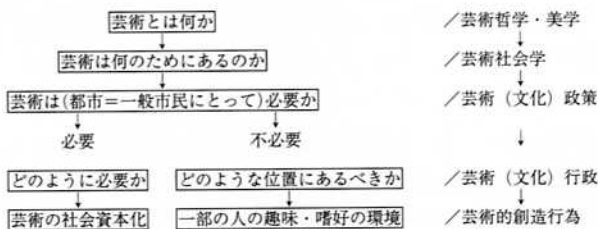
- ・アーティストなど、作家、表現者個人の精神内部
- ・関係者・専門家みの結社、グループ、工房などの内部

- ・一部の愛好家たちの閉ざされた趣味・嗜好の内部
- ・研究、実績対象としてのアカデミズムの内部

これらの傾向は、「芸術活動の権威化」「カルト化」「自由な表現者の流出」「中央崇拜」「一般市民の生活との乖離」などを生みやすい。

これら「内部」は、むしろ「芸術創造行為」にとって必要不可欠な「胎」であることは論を待たない。しかし、先駆的な、あるいは伝統的な芸術的創造行為を、「都市に関わるすべての人々の『精神性』を深め、豊かにし、また、新たな光を啓くもの」として見るとき、これら閉ざされた幾つもの「内部」を越えて、ひろく一般市民の共通の財産＝精神的な社会資本として認知されることが、精神的な広がりや深まりのある都市として「成熟」するためには必要であろうか。

そのためには、例えば次のフローチャートのような、段階的な議論が必要不可欠であろう。



国際的で個性的な都市の魅力と威信

国際学部教授 大井 健地

1. デン・ハーグ

ウジェーヌ・フロマンタンはよく知られた画家であった。官設サロン展の審査員という役職にもついた。世俗的成功はものにした画家だった。

サイドの業績によって僕たちがオリエンタリズムという現象に注目させられたのは近年のことだが、美術におけるオリエンタリズムを代表する画家のひとりがこのフロマンタンである。さらに興味深いのは、フロマンタンが自分のオリエンタリズムの画業に低い評価しか与えていないことである。彼はむしろ文筆の世界で自分の表現欲を満たしていた。

そのうちの最もすばらしい著述が『昔の巨匠たち』(原著1876年/高橋裕子訳『オランダ・ベルギー絵画紀行』(上・下)岩波文庫、92年)である。この本を紹介する拙文をまず書き抜いておきたい。

ハーグという都市の礼讃から第二部、オランダ紀行が始まる。戦乱の後の和平会談開催地としてフロマンタンはこの町に白羽の矢をたてるという。くすんだ錆色の町、風格ある「外観のかけに、沢山の美術品を秘匿している町なのだから」。国際的で個性的な、ほんとうに魅力的な都市とは何か?と思わせる(『大井健地の美術図書館』211頁)。

ハーグ [DEN HAAG デン・ハーグ] はオランダの行政の中心地であって、国際司法裁判所・平和宮があることでも知られている。三年前だった、「フェルメール展」を見にこの国際都市を僕も訪れたのだった。展覧会会場はマウリッツハイス美術館。

マウリッツハイス、この建物はオランダ17世紀の代表的建築の一つで、オランダ総督オラニエ家のヨーハン・マウリッツ伯爵の邸宅として建てられた。所蔵品の白眉は、フェルメール《デルフトの眺望》、レンブラント《テュルプ博士の解剖学講義》などである。このことは、つまり17世紀の名品を17世紀の私邸で、鑑賞できているのである。

フロマンタンはデン・ハーグのことを「この町の広やかさ、清潔さ、ピトレスクでしゃれた眺め、ちょっと気取った優美さは、来客を歓迎するこの上なく洗練された物腰のように見受けられる」と記し、その最終的な理由の一つを、「町の優雅なたたずまいの内部には、たくさんの美術品という宝物が隠されているからだ」とするのである。

オランダ第3のこの都市で今年(1999年)5月、非政

府組織の人々から約8000人が集まって「戦争のない21世紀を求める『ハーグ世界平和市民会義』が開催され、「21世紀の平和と正義を求めるアジェンダ」を採択し国際的なアピールをしたことをここに記しておくのは無意味ではないだろう。

2. パリ

市立大学の図書館で、“PARIS VU DU CIEL”という本が目についた。カバーが奪われている結果そっけない黒い表紙をめくると、それは『空から見たパリ』と題された翻訳写真集（アルテュス・ベルトラン著、磯村尚徳訳、河出書房、93年2月）だった。西陽を反射して金色に光るセヌを中心夕映えの、というより夕闇のパリの俯瞰写真が冒頭にあって、その闇はまことにパリという都市の歴史の重い積み重なりを感じさせる。ヘリコプターで、セヌ川沿い、右岸、左岸、パリ市門界限をもう充分ですというぐらいたっぷり撮りあつめている。灰色が主調で緑はわずかの部分。例外はポンピドーセンターの屋上の青と白で、なるほどポンピドーの異物性を際立たせている。

僕のおぼつかないパリの土地勘を、浄め正してくれる良さ以上に、上空から見るといふその新鮮な、オーバーに言えば衝撃的なその視点が歴史的な国際都市への新しい接近を可能にしてくれている。親しみやすいというよりは、謎の魅力を深めるというような工合に。

公共のモニュメントとモニュメント彫刻が都市の要所をとおさえていることがよくわかる。歴史的な建物と共生し響和して、都市の節目を整序し、都市の風貌に輪郭を与えるものこそ、モニュメントと呼ぶにふさわしいのだ。歴史的なものを蘇生し喚起させることにおいてもパリは魅力的な都市なのである。

「威信」ということばに僕は警戒的でいたい、というのは「国家的威信」とともに起こされる行動はおおむね不幸で多く不正であるからだ。尊厳の主体が個人である場合より、組織や制度、体制の威信のために強要される尊崇の例がいかに多いか。フランス国家とて例外ではありえない。だが、僕がパリを空から捉えたこの写真集を見て感ずるのは、政治的あるいは経済的威信ではなく、この都市が自他に覚醒するところは文化的威信ということなのだ。この都市は文化的威信について自覚的である。

パリは停滞しない。〈たゆたえども沈まず〉とはシテ島から発するこの都市の自賛だが、いってしまえば沈まないための仕掛けを常に自らに課して、次の世代の波に向かっていく。すなわち、フォーラム・デ・アル、ヴィレットの科学・技術博物館（僕はここにまだ行ったことがない）、アラブ世界研究所、デファンスの新凱旋門（ここも）、そしてバステューユのオペラ座などなど。都市の新名所として人の心をひき、志低からぬ思索や地道

な研究とも結びついて土地になじみ、そして都市を形成する場所となる。

奇抜な外観のポンピドーセンターも、駅舎を改装したオルセー美術館も、もはやパリにはなくてはならぬ美術・文化センターであり、大改造によって一層巨大化したルーブル美術館とあわせて、美術館の意味を知っている旅行者は最低3日はパリに滞在することを余儀なくさせられる。一週間、この都市にいれば、無料開館、夜間開館を組み合わせて、安く、こころゆくまで、あるいは体力の限りまで全世界の現代までの美術史を堪能することができることになるのである。

パリ市民のためだけ、フランス国民のためだけでなく、観光収益といったケチな近視的金銭勘定でなく、ここには世界に開かれ、そして未来を見すえた文化政策があるといえる。

3. 宮殿・城・教会・都市

フロマンタンの生きた時代はまた、美術館という社会教育施設が芽吹いていく時代だったとも言える。たとえば彼がこのオランダ・ベルギー絵画紀行で最初に訪れたブリュッセル王立美術館は旧総督宮殿の建築が転用されたのだった。

ブリュッセルの南約18キロにワートルローがある。この地でナポレオン軍は敗退した。ナポレオンが征服した土地から略奪した美術品はほぼ元の所蔵先に返還される。そしてそれらの作品は公共の場で公開されてゆく。公共品の意識が歴史的に形成されてゆくのである。

宮殿のみならず、美術館になった城蹟もある。うるわしい例のひとつは、イタリア、ヴェローナのカステルヴェッキオである。中世の城蹟が秀れた建築家によって快適で明確な空間の市立美術館になっている。また、ミラノのスフォルツァ城はミケランジェロの《ロンダニーニのピエタ》などを展示する広大な市立博物館となっている。

美術館になった教会もある。これもイタリアに例をとれば、フィレンツェのマリーノ・マリーニ美術館こそは最もすばらしい転用の例である。旧サン・パンクラツィオ教会という廃寺が、あのルネサンス発祥の古都唯一の現代彫刻の巨匠の美術館としてみごとに活用されている。教会が往時から美術品展示館の機能を果たしてきたことを思えばべつだんに奇妙ではないが、ここでは中世の空間を現代に生かす建築的処理の卓抜な例、模範的な例となっている。おすすめ、必見の美術館である。

フィレンツェの名をあげればヴェネツィアに触れないわけにいかない道理となる。

美術館になった都市、それがヴェネツィアであろう。

4. 広島

高村光太郎はこういう。

「内にコスモスを持つ者は世界の何処の辺遠に居ても常に一地方的の存在から脱する。岩手県花巻の詩人宮沢賢治は稀に見る此のコスモスの所持者であった。彼の言う所のイーハトーヴは即ち彼の内の一宇宙を通しての此の世界全般のことであった」(「高村光太郎全集 8 巻228 頁)。

広島という都市そのものが内にコスモスを持ちたいと努めている町ではないか。

宮沢賢治は、「イーハトーヴ」では、「罪や悲しみさえここでは聖くきれいに輝いている」という。

広島は変貌が当然であるかのようにそのたたずまいは絶えず変化している。単純な話だが、この町で古い建物であれば、ただそのことだけで注目させられる。

「都市の成熟と芸術の役割—歴史的建造物と芸術の共振—」と題された広島市立大学のこの特定研究で、会場になった3つの建物・即ち・広島大学学校教育学郡旧図書館、旧宇品陸軍糧秣支廠倉庫、それにサントリー宮島工場、そのそれぞれに建物の息遣いを聞くように僕は謙虚にその古さを感じていた。展示された3人の芸術学部の先生の造形作品の存在が往時との対話を生み、緊張感のある空間を創っていた。

広島から広島、こみあげてくる重いヒロシマ、その揺りもどしとしてのやさしくやわらかいひろしま。

藩主の庭園に隣接する美術館には古美術品だって収蔵している。この都市からはずいぶん遠い異国の宝石だって輝いている。

西練兵場だった土地の、水に囲まれた円形の美術館には水色に染まって酒場のふたりの女性が背を向けている。その前庭には、愛とやすらぎのためにと刻まれた石がある。

比治山の上、陸軍墓地や旧ABCと少し離れて現代と名のつく美術館があり、アバカノヴィッチの坐像の群れからは無声の読経が流れ出しているようであり、ムーアのアーチの周辺には樹木が生い繁っている。

広島市が主催する文化事業に、カタカナ・ヒロシマを名乗るものがある。ヒロシマ・アニメ・フェスティバル、それに今年のオーガスト・イン・ヒロシマ'99である。広島市現代美術館が主催するヒロシマ賞は今年はまだ4回目であり、受賞者ウディチコ氏は原爆ドームを被爆者に見立てたパブリック・プロジェクトを行うという。

原爆ドームが象徴する都市ヒロシマは世界にいつそう開かれてほしい。広島の内のコスモスから発信する、核兵器は人類と共存できないというメッセージは世界のど

の町にも届いてほしい。

「パリについては、すでに万卷の書物が書かれてきたといっても過言ではない。おそらく語ることへの欲望をこれほど不断に挑発しつづけてきた都市は、他に類例を見ないのではないか。」(石井洋二郎「パリー都市の記憶を探る」7頁)。

僕は「広島については」と考えてみる。なお広島“都市の成熟”は未だしなのだ。端的な例えでは「ヒロシマ文学館」はいつできるのか。

旧日本銀行は市民が活用できる文化施設としていつ開扉されるのだろうか。ウディチコ氏の仕事にも明らかなようにオフ・ミュージアム(美術館逃亡)の造形思想と実験作品は既に重視すべき傾向となっている。このたびの特定研究の成果もまたその方向であるといえる。

具体的提案を最後に記す。旧日本銀行を芸術センターとして早期にオープンする、そのための現実的検討をはじめようではないか。(1999年8月)